

月夜のけだもの

宮沢賢治

青空文庫

十日の月が西の煉瓦塀^{れんぐわべい}にかくれるまで、もう一時間しかありませんでした。

その青じろい月の明りを浴びて、獅子^{しし}は檻^{をり}のなかをのそのそあるいて居^をりましたが、ほかのけだものどもは、頭をまげて前あしにのせたり、横にごろつとねころんだりしづかに睡^{ねむ}ってゐました。夜中まで檻の中をうろうろうろしてゐた狐^{きつね}さへ、をかしな顔をしてねむってゐるやうでした。

わたくしは獅子の檻のところに戻つて来て前のベンチにこしかけました。

するとそこらがぼうつとけむりのやうになつてわたくしもそのけむりだか月のあかりだかわからなくなつてしまひました。

いつのまにか獅子が立派な黒いフロックコートを着て、肩を張つて立つて

「もうよからうな。」と云^いひました。

すると奥さんの獅子が太い金頭のステッキを恭しく渡しました。獅子はだまつて受けとつて脇^{わき}にはさんでのそりのそりとこんどは自分が見まはりに出ました。そこらは水のころころ流れる夜の野原です。

ひのき林のへりで獅子は立ちどまりました。向ふから白いものが大へん急いでこつちへ

走って来るのです。

獅子はめがねを直してきつとそれを見なほしました。それは白熊しろくまでした。非常にあわててやって来ます。獅子が頭を一つ振って道にステッキをつき出して云ひました。

「どうしたのだ。ひどく急いでゐるではないか。」

白熊がびっくりして立ちどまりました。その月に向いた方からだはぼうつと燐りんのやうに黄いろにまた青じろくひかりました。

「はい。大王さまでございますか。結構なお晩でございます。」

「どこへ行くのだ。」

「少し尋ねる者がございました。」

「誰だ。たれ」

「向ふの名前をつい忘れまして、」

「どんなやつだ。」

「灰色のざらざらした者ではございますが、眼めは小さくていつも笑つてゐるやう。頭には聖人のやうな立派な瘤こぶが三つございます。」

「ははあ、その代り少しからだが大き過ぎるのだらう。」

「はい。しかしごくおとなしうございます。」

「所がそいつの鼻ときたらひどいもんだ。全体何の罰であんなに延びたんだらう。おまけにさきをくるつと曲げると、まるでおれのステッキの柄のやうになる。」

「はい。それは全く仰せおほの通りでございます。耳や足さきなんかはがさがさして少し汚なうございます。」

「さうだ。汚いとも。耳はボロボロの麻のはんけちあらい或は焼いたするめのやうだ。足さきなどはことに見られたものでない。まるで乾いた牛の糞くそだ。」

「いや、さう仰おつしやつてはあんまりでございます。それでお名前を何と云はれましたでございませうか。」

「象だ。」

「いまはどちらにおいででございませうか。」

「俺おれは象の弟子でもなければ貴様の小使ひでもないぞ。」

「はい、失礼をいたしました。それではこれでご免かうむを蒙ります。」

「行け行け。」白熊しろくまは頭を掻かきながら一生懸命向ふへ走って行きました。象はいまごろどこかで赤い蛇じゃの目の傘かさをひろげてゐる筈はずだがとわたくしは思ひました。

ところが獅子は白熊のあとをじつと見送つて眩くらやきました。

「白熊め、象の弟子にならうといふんだな。頭の上の方がひらたくていゝ弟子になるだらうよ。」そして又のそのそと歩き出しました。

月の青いけむりのなかに樹きのかげがたくさん棒のやうになつて落ちました。

そのまっくろな林のなかから狐きつねが赤あか縞しまの運動ズボンをはいて飛び出して来ていきなり獅子の前をかけぬけようと思いました。獅子は叫びました。

「待て。」

狐は電気をかけられたやうにブルルツとふるへてからだ中から赤や青の火花をそこら中へばちばち散らしてはげしく五六遍まはつてとまりました。なぜか口が横の方に引きつつてゐて意地悪さうに見えます。

獅子が落ちついてうで組みをして云ひました。

「きさまはまだ悪いことをやめないな。この前首すぢの毛をみんな抜かれたのをもう忘れたのか。」

狐がガタガタ顫ふるへながら云ひました。

「だ、大王様。わ、わたくしは、い今はもうしゃう正直でございます。」齒がカチカチ云

ふたびに青い火花はそこらへちらばりました。

「火花を出すな。銅臭くていかん。こら。偽うそをつくなよ。今どこへ行くつもりだったのだ。」

狐は少し落ちつきました。

「マラソンの練習でございます。」

「ほんたうだらうな。鶏を盗みに行く所ではなからうな。」

「いえ。たしかにマラソンの方でございます。」

獅子は叫びました。

「それは偽うそだ。それに第一おまへらにマラソンなどは要らん。そんなことをしてゐるからいつまでも立派にならんのだ。いま何を仕事にしてゐる。」

「百姓でございます。それからマラソンの方と両方でございます。」

「偽だ。百姓なら何を作つてゐる。」

「粟あはひゑと稗ひゑ、粟と稗でございます。それから大豆まめでございます。それからキャベヂでございます。」

「お前は粟を食べるのか。」

「それはたべません」

「何にするのだ。」

「鶏にやります。」

「鶏が粟をほしいと云ふのか。」

「それはよくさう申します。」

「偽だ。お前は偽ばかり云つてゐる。おれの方にはあちこちからたくさん訴が来てゐる。

今日はお前のせなかの毛をみんなむしらせるからさう思へ。」

狐きつねはすっかりしよげて首を垂れてしまひました。

「これで改心しなければこの次は一ぺんに引き裂いてしまふぞ。ガアツ。」

獅子ししは大きく口を開いて一つどなりました。

狐はすっかりきもがつぶれてしまつてたゞ呆あきれたやうに獅子の咽喉のどの鈴の桃いろに光る

のを見てゐます。

その時林のへりの藪やぶがカサカサ云ひました。獅子がむつと口を閉ぢてまた云ひました。

「誰たれだ。そこに居るのは。こゝへ出て来い。」

藪の中はしんとしてしまひました。

獅子はしばらく鼻をひくひくさせて又云ひました。

「狸、狸。こら。かくれてもだめだぞ。出る。陰險なやつだ。」

狸が藪からこそこそ這^はひ出して黙つて獅子の前に立ちました。

「こら狸。お前は立ち聴きをしてゐたな。」

狸は目をこすつて答へました。

「さうかな。」

そこで獅子は怒つてしまひました。

「さうかなだつて。ずるめ、貴様はいつでもさうだ。はりつけにするぞ。はりつけにしてしまふぞ。」

狸はやはり目をこすりながら

「さうかな。」と云つてゐます。狐はきよろきよろその顔を盗み見ました。獅子も少し呆れて云ひました。

「殺されてもいゝのか。呑^{のん}気なやつだ。お前は今立ち聴きしてゐたらう。」

「いゝや、おらは寝てゐた。」

「寝てゐたつて。最初から寝てゐたのか。」

「寝てゐた。そして俄にはかに耳もとでガアツと云ふ声がするからびっくりして眼を醒さましたのだ。」

「あゝさうか。よく判わかつた。お前は無罪だ。あとでご馳走ちそうに呼んでやらう。」

狐きつねが口を出しました。

「大王。こいつは偽うそつきです。立ち聴きをしてゐたのです。寝てゐたなんてうそです。ご馳走ちそうなんてとんでもありません。」

狸たぬきがやつきとなつて腹鼓を叩たたいて狐を責めました。

「何だい。人を中傷するのか。お前はいつでもさうだ。」
すると狐もいよいよ本氣です。

「中傷といふのはな。ありもしないことで人を悪く云ふことだ。お前が立ち聴きをしてゐたのだからそのとほり正直にいふのは中傷ではない。裁判といふものだ。」

獅子ししが一寸ステッキをつき出して云ひました。

「こら、裁判といふのはいかん。裁判といふのはもつとえらい人がするのだ。」
狐が云ひました。

「間違ひました。裁判ではありません。評判です。」

獅子がまるであからんだ栗くりのいが様な顔をして笑ひころげました。

「アツハツハ。評判では何にもならない。アツハツハ。お前たちにも呆あきれてしまふ。アツハツハ。」

それからやつと笑ふのをやめて云ひました。

「よしよし。狸は許してやらう。行け。」

「さうかな。ではさよなら。」と狸は又敷やぶの中に這はひ込みました。カサカサカサ音がだんだん遠くなります。何でも余程遠くの方まで行くらしいのです。

獅子はそれをきつと見送つて云ひました。

「狐。どうだ。これからは改心するか、どうだ。改心するなら今度だけ許してやらう。」

「へいへい。それはもう改心でも何でもきつといたします。」

「改心でも何でもだ。どんなことだ。」

「へいへい。その改心やなんか、いろいろなことをみんなしますのです。」

「あゝやつぱりお前はまだまだだ。困ったやつだ。仕方ない、今度は罰しなければなら
ない。」

「大王様。改心だけをやります。」

「いやいや。朝までこゝに居ろ。夜あけ迄に毛をむしる係りをよこすから。もし逃げたら承知せんで。」

「今月の毛をむしる係りはどなたでございますか。」

「猿だ。」

「猿。へい。どうかご免をねがひます。あいつは私とはこの間から仲が悪いのでどんなひどいことをするか知れません。」

「なぜ仲が悪いのだ。おまへは何か欺したらう。」

「いゝえ。さうではありません。」

「そんならどうしたのだ。」

「猿が私の仕掛けた草わなをこはしましたので。」

「さうか。そのわなは何をとる為だ。」

「鶏です。」

「あゝ呆れたやつだ。困ったもんだ。」と獅子は大きくため息をつきました。狐もおおいおい泣きだしました。

向ふから白熊が一目散に走つて来ます。獅子は道へステッキをつき出して呼びとめま

した。

「とまれ、白熊、とまれ。どうしたのだ。ひどくあわててゐるではないか。」

「はい。象めが私の鼻を延ばさうとしてあんまり強く引つ張ります。」

「ふん、さうか。けがは無いか。」

「鼻血を沢山出しました。そして卒倒しました。」

「ふん。さうか。それ位ならよからう。しかしお前は象の弟子にならうといったのか。」

「はい。」

「さうか。あんなに鼻が延びるには天才でなくてはだめだ。引っぱる位でできるもんぢやない。」

「はい。全くでございます。あ、追ひかけて参りました。どうかよろしくおねがひ致します。」

白熊は獅子のかげにかくれました。

象が地面をみしみし云はせて走つて来ましたので獅子が又ステッキを突き出して叫びました。

「とまれ、象。とまれ。白熊はこゝに居る。お前は誰^{たれ}をさがしてゐるんだ。」

「白熊です。私の弟子にならうと云ひます。」

「うん。さうか。しかし白熊はごく温和おとなしいからお前の弟子にならなくてもよからう。白熊は実に無邪気な君子だ。それよりこの狐を少し教育してやって貰もらひたいな。せめてうそをつかない位迄な。」

「さうですか。いや、承知いたしました。」

「いま毛をみんなむしらうと思つたのだがあんまり可哀さうでな。教育料はわしから出さう。一ヶ月八百円に負けて呉くれ。今月分丈だけはやって置かう。」獅子はチョッキのかくしから大きながま口を出してせんべい位ある金貨を八つ取り出して象にわたしました。象は鼻で受けとつて耳の中にしまひました。

「さあ行け。狐きつね。よく云ふことをきくんぞ。それから。象。狐はおれからあづかつたんだから鼻を無暗むやみに引っぱらないで呉れ。よし。さあみんな行け。」

白熊しろくまも象も狐もみんな立ちあがりました。

狐は首を垂れてそれでもきよろきよろあちこちを盗み見ながら象について行き、白熊は鼻を押へてうちの方へ急ぎました。

獅子ししは葉巻をくはへマツチをすつて黒い山へ沈む十日の月をじっと眺ながめました。

そこでみんなは目がさめました。十日の月は本当に今山へはひる所です。

狐も沢山くしやみをして起きあがつてうろうろうろうろ^{をり}檻の中を歩きながら向ふの獅子の檻の中に居るまっくらな大きなものを暗をすかしてちよつと見ました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。これにならない、ルビの拗促音も、小書きにしました。

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月夜のけだもの

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>